

東教大百六年の幕切れ

さようなら、東京教育大——。東京高師の昔から、教育の本山として社会に送り出した卒業生は約四万人。教職者の育成を中心に、各方面に残した足跡は大きい。しかし、その名前も三月いっぱい消えていく。東京都文京区大塚のキャンパスで閉学記念式が行われた十五日、学内には、百六年の長い歴史の幕を閉じるさびしさと、公文書の築波移送などに追われるあわただしさが交錯していた。再切れの話題をひろう。

東京を去り筑波大に



歴史を記念し 大塚に資料館

このほど、この歌の三番を新しく作詞した。一年を経た。「年を経た。いや、ある意味では、教職員以上かも知れない。吉本二郎教育学部長のもとへは、このところ教員から「心のふるさと」としてきた教育大が消えていくのはさびしい」といった便りがいくつも寄せられているという。十一日に開かれた教育学部のお別れ会では、あるOBは「移転といえは移転だし、移転でないといえは移転でない。おめでどうといふ気になれない。複雑な気持ちだ。ともかく、われわれをハイマートロス(故郷を失った者)という意味のドイツ語)にしないでいただきたい」と訴えた。これは多くの卒業生に共通している思いに違いない。

消えゆく母校をしのんで開かれた東教大閉学記念式——東京都文京区大塚の同大講堂で。高き東教大は消ゆるとも、人の心に永遠に残らん」という歌を卒業生におくったが、十五日の閉学式典でも、心境を歌に託した。同大には、大正半ば、東京高師の大先輩格への悲願をこめてつくられ、以来、半世紀にわたって歌いつがれてきた「宣誓歌・桐の葉」という歌がある。同学長はこのほど、この歌の三番を新しく作詞した。「年を経た。いや、ある意味では、教職員以上かも知れない。吉本二郎教育学部長のもとへは、このところ教員から「心のふるさと」としてきた教育大が消えていくのはさびしい」といった便りがいくつも寄せられているという。十一日に開かれた教育学部のお別れ会では、あるOBは「移転といえは移転だし、移転でないといえは移転でない。おめでどうといふ気になれない。複雑な気持ちだ。ともかく、われわれをハイマートロス(故郷を失った者)という意味のドイツ語)にしないでいただきたい」と訴えた。これは多くの卒業生に共通している思いに違いない。

惜別の情つきぬキャンパス

▲形見▼ 教育大付属の小、高校などは、全部筑波大付属の形で現在地に存続する。しかし、いままでと違って大学と遠く離れ、行き来が不便になることから、大塚キャンパス内に学校教育部を設け、センターをつくるなどして、交流を強化したいという。それとともに、資料室を設け、教育大の形見の品々を保存する計画が進められている。そこに取められるのは教育大の校印、校旗、門標、若竹の像やノーベル賞受賞の朝永振一郎元学長の胸像など。ボヘミアの教育学者コメニウスの研究文献を納め、世界にも誇れるというコメニウス文庫も外部の閲覧の便宜を考え、ここに置きたいという。そのほか、明治

▲鎮魂▼ 昨年三月、文学部が行ったのは三分の一だけ。他多くの多くは、筑波に行くことをいさぎよしとせず、他の国立、私立大などにあらたな道を求め、かつて百人を超えた教授陣は散りちりになった。この本は、そうした文学部の足跡の記録であり、また鎮魂の書といえる。筑波問題で大学を去った教官は理学、教育学部など、少数だが、他学部でもいた。全学的にみても紛争の傷は深かったのである。そ

▲郷愁▼ 発展的解消、筑波